

こころ育てる絵本との出会い

まがちゃん通信

2018 2 - 3 vol. 48

絵本作家インタビュー

いしかわこうじ

特集 私の絵本感



いしかわこうじ



「美しさと気品」
子どもたちにこそ
上質なものを届けたい

いしかわこうじ プロフィール

1963年千葉県生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。
第9回講談社童画グランプリで大賞。2004年イタリア・ボローニャ国際絵本原画展で
入選。第44回造本装幀コンクールで『たまごのえほん』（童心社）が日本書籍出版協会
理事長賞。『おめんです』（偕成社）が第1回積文館グループ絵本大賞を受賞。ユニークな
発想と豊かな色彩の造形で、芸術性とポピュラリティの高い絵本を数多く生み出している。
『どうぶついろいろかくれんぼ』（ポプラ社）をはじめとする「これなあに？かたぬきえほん」
シリーズは累計200万を超えるロングセラー。海外でも翻訳版の出版多数。

いしかわこうじ 展開催
平成30年2月3日(土)～3月29日(木)



「つみきくん」シリーズ
(ポプラ社)



「これなあに？かたぬきえほん」
シリーズ(ポプラ社)



『ふねくんのたび』(ポプラ社)

ちいさなふねくんは、男の子にたのまれた手紙をとどけに、大きな港町まで
出かけることになりました。ふねくんといっしょに、のんびりゆったり、時には嵐
にあいながら、たび気分を味わえます。心躍る迫力の観音ページ付きです。



展
示
絵
本

春のギャラリーでは、ユニークな発想と豊かな色彩で独特の作品を作りだす
いしかわこうじ先生の世界を一堂にご紹介します。

いしかわこうじ先生に インタビュー



絵本作家になられたきっかけは？

子どもが生まれたことが大きいですね。毎日読み聞かせているうちに、絵本の面白さや可能性が分かってきました。それで、自分でも作りたいという思いが強くなりました。

画材は何を使っていますか？

パソコンのソフト、Photoshop等で描いています。一筆一筆描いていくので時間はかかりますが、温かく自然な仕上がりになります。

今回、原画を展示する絵本の制作秘話や
思い出を教えてください。

「ふねくんのたび」

僕は海や港が好きなので、船を主人公にしました。「のりものいろいろかくれんぼ」の表紙に描いた船が、ふねくんの原型なんです。絵本の制作においては、ラストに出てくる大きな港町の描写にかなり苦労しましたね。

東京や横浜の港を見て回ったあと、熱海に取材へ行きました。海岸に立つホテルの屋上露天風呂から見下ろした港の情景がヒントとなって、無事に絵本を完成できました。

「これなあに？かたぬきえほん」シリーズ

この作品には、子供の頃に折り紙や工作やお絵かきに夢中だった僕の本質が、ストリートに表れています。「子どもたちに美しい

色と形を見せてあげたい！」という僕の思いが伝わったうれしいです。

「つみくくん」シリーズ

子どもに買った積み木セットを眺めていた時に、あるイメージが頭に浮かびました。それは、積み木セットの木箱から、積み木が出てきて人の形になり、紐を引いて歩く姿です。これが創作の原点になりました。今回の展覧会では、ブルドーザーや小鳥や汽車などに変身した「つみくくん&つみきちゃん」の彫刻も出品します。

今まで手がけられた絵本の中で、一番印象
深い絵本は？

「まねっこえほん」シリーズ（ポプラ社）です。これは、赤ちゃんだった娘と一緒に作った絵本と言ってもよいかもしれません。試作品を娘に何度も読み聞かせて、まねっこしやすい表情や動作を見つけていきました。「あかちゃんにこにこ」は0歳、「あかちゃんはい」は1歳、「あかちゃんだっこ」は2歳...という感じで、娘と絵本が一緒に成長していきました。

絵本をお作りになるときのこだわりは？

僕は、「美しさ」と「気品」を重要視しています。子どもたちにこそ、上質なものを届けたいと思っているからです。僕の絵は、一見シンプルに見えるでしょう。しかし完成までには、かなり時間がかかっているんですよ。色彩や形の美しさを磨き上げる作業や仕上げの色校正も、じっくり丁寧に行なっているのです。

絵本を通じてお伝えになりたいことは？

僕の絵本を読んで、豊かな気持ちになったり、元氣になってくれたらいいな！と思います。

今後どのような絵本を描いていかれますか？

楽しく美しい絵本を作っていきたいです。未来の子ども達や、海外の人にも読んでいただけるように、時代の波に押し流されない普遍的な表現に到達したいと考えています。

ご趣味についてお聞かせください。

いろんな国に旅行をすることが好きです。旅で見た風景や光や空気感は、頭の中に染みついて、いつでも再生可能になるんです。旅行中はリラックスしていますが、新しい絵本のアイデアやヒントが見つかることも多いです。

お好きな言葉を教えてください。

「チャレンジしないことが最大のリスクである」。常に表現のフロンティアを切り開くことが、自分の楽しみになっています。

ファンの皆さんへメッセージをお願いします。

僕の絵本を楽しんでいただき、ありがとうございます。僕にとって絵本は自分の「子ども」みたいにかわいくて大切です。皆さんに愛され、読んでいただけることは、この上なくうれしいです！

いしかわこうじ先生、ありがとうございました！

いしかわこうじ先生 サイン入りの絵本を3名様に プレゼント

応募方法 氏名、年令、住所、電話番号をご明記のうえ、
ハガキでご応募ください。
あて先 〒939-0283 射水市鳥取50 射水市大島絵本館
いしかわこうじ サイン本プレゼント係
締め切り 平成30年4月10日 消印有効

※発表は発送をもって代えさせていただきます。

3/24(土) いしかわこうじ先生が 来館されます！

- 10:30~11:30 おはなし会
- 13:30~15:00 ワークショップ



いずれも参加費無料(入館料のみでご参加いただけます)

★サイン会もあります(要整理券)

※詳しくは P.6 をご覧ください



「ふねくんのたび」
(ポプラ社)



米田 昌功

日本画家、人人会会員、日本美術家連盟会員
アートNPO工房ココベリ代表(障害者の芸術活動支援)

\特集/ 私の絵本感

絵本 絵本 本 その思い

「絵本」はいつの間にか書棚に混ざっていた。読者が基本的に子どもであるという前提が自分にはなく、図像と文章が響き合っているばかりであえず絵本であると思っていたように、今見ると絵本、画集、写真集、詩画集が混在して並べてある。今回の執筆のためとそこに手を伸ばして出てきたのは藤原新也さんの「メント・モリ」であった。さすがにこれは絵本とは呼べない気がする。田島征三さんも画集として読んでいた。私の日本画作品は記号と風景と言葉が混在しており、表現上の言葉と絵の分別にあまり頓着していない。支援に取り組んでいるアール・ブリュットもジャンル分けできない表現が多い。考えてみると、絵巻物ややまと絵など古典絵画においては、言葉と絵が相互補完して世界感を構築しているし、もともと日本の芸術表現は縁縁といった作品鑑賞のための窓を必要とせず、家屋を舞台として自然、言葉、絵、彫刻、工芸などが様々にクロスオーバーしてひとつの景色を作り、そこでしか体験できない感覚に面白さを感じてきた。表現への希求欲、物怖じしない大らかな組み合わせによる創造のセンスが日本における美術、ものづくりの根底に流れて

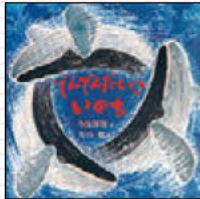
いる。その意味では絵本も日本的だし、列島における古代からの芸術的営みや精神性の延長上に位置するものと言える。自宅の床の間に絵本を開いて飾ってみたことがある。素敵に馴染む。読むことでも十分だがそれだけでは勿体ない。絵本の魅力である。言葉と絵を同次元で構成し、想いや物語を的確に伝え、体験・共感できる「かたち」を創るのは大変な作業だ。幼な心と大人心、絵と言葉など、大きな振り幅の振り子を同時にコントロールする感性や努力、技術が必要である。だから絵本作家はすごいと思う。部屋で絵本を開く。作品世界を体験し様々な感情が動く。読後には作者と作品へのリスベクト感に包まれ、良質な時間を過ごせたことに感謝し、余韻を味わう。そして時を経て再びページをめくる。お気に入りの音楽のように何度も。「生(き)」の感触を確かめるように。生まれたばかりの子どもや動物を観た時、抱いた時にも似た、機械やバーチャルでは再現できない命の肌触りとも呼ぶべき感覚だ。絵本のように感動を伝えられるものが世の中にもっと増えればいい。そのためには大島絵本館は大切な場所である。

私のおすすめ絵本

『でんでんたいこいのち』

今江祥智/文 片山 健/絵
童心社

三代にわたる青春叙事詩ともいべき物語で、片山健さんの絵が有無を言わせない素晴らしさ。劇場で映画を見たような読後感がある。



『土神と狐』

宮沢賢治/作 小林敏也/絵
好学社

土着と洗練がまじりあったその姿によって、何度も読んできた物語から新たな音楽や効果音が聞こえてくる。絵本だからできた物語の再創造のお手本。



『ここで土になる』

大西福夫/文・写真
アリス館

理不尽な権力に翻弄される老夫婦の話が、自然あるいは災害にも寄り添って生きてきた日本人の命の物語に昇華されている。



『雷の落ちない村』

三橋節子/作
小学館

日本画家が新しい表現として絵本を選んだのではなく、死に向かう日常の積み重ねの必然として絵本があった。子どもには時を経て作者の物語を聞かせたい。



『世界のはじまり』

メイヨー/再話 プライアリー/絵
百々佑利子/訳
岩波書店

創世神話は国や民族を超えてどれも面白い。人は先祖が語った物語を知ることによってこの世に生きる理由を感じ取る生き物なのだ。これ大事。



『旅の絵本』

安野光雅/作
福音館書店

言葉がなく鳥瞰の風景のみで構成された静かな絵本。今となればドローン映像に酷似しているが、もっとゆったりした時間の奥深さを感じる。

